

日時：平成 25 年 10 月 23 日
 会場：日林協会館 5 階大会議室（東京都千代田区）
 主催：日本森林技術協会・韓国山地保全協会

森林景観の復元と多様性保全の取り組み —日本及び韓国における事例と今後の方向—

日本森林技術協会
 理事 石塚 和裕

平成 25 年 10 月 23 日（水）に日林協会館において、日本森林技術協会と韓国山地保全協会の協働事業の一環として公開シンポジウムが開催された（写真①）。



▲写真① 会場風景

まず初めに、主催者を代表して本会 加藤 鐵夫 理事長から開会挨拶と、昨年 5 月、韓国山地保全協会との森林・林業技術に関する協働事業覚書に関する紹介が行われた。次に、共同主催者である韓国山地保全協会 具 吉本（グー・キルボン）副会長から、韓国における持続可能な森林経営の方向と、山地保全協会の活動紹介が行われ、来年 3 月 15 日に協会が 10 周年を迎えるため、今回はソウルで開催したい旨提案があった。

来賓挨拶として、林野庁計画課海外林業協力室 赤堀 聡之 室長から祝辞があったが、冒頭流暢な韓国語で挨拶があり、林野庁としても山林庁との交流を開始したことの紹介があった。

その後講演に移り、山林庁山地管理課 金 元中（キム・ウォンジュン）氏による「韓国の山地の

現況と山林復元分野 主要政策方向」では、国土緑化が完了し、持続可能な森林経営を目指す韓国では、国土の 64%を占める森林を含む山地の内で 26%を公益用山地に指定し、土地利用制限を行うとともに、山林保護や荒廃防止を積極的に行っていること。その中で、韓半島の脊梁（せきりょう）山脈である太白山脈及びそれから派生する山脈群を「白頭大幹」と総称して、人為によって改変あるいは荒廃した地域を対象に景観と自然植生の保全・復元事業を積極的に行っていることが紹介された（写真②）。



▲写真② 韓国の山地復元

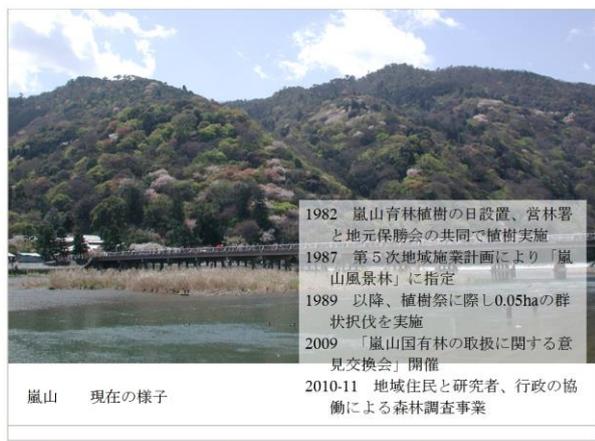
韓国山地保全協会 許 泰鐵（フー・テチュル）氏による「韓国の景観復元の事例—白頭大幹金泉バラムジェを中心に—」では、白頭大幹の中でも標高 900m 前後の中核地域にある金泉バラムジェの事例紹介があった。ここでは、山頂尾根部に旧軍事施設及び付帯道路が放置されていたので、航空写真等を活用して土木工事により設置以前の原地形に全て復元すると共に、在来の自然植生に

復元誘導するための植栽を行っていることが紹介された（写真③）。



▲写真③ 地形復元

日本側の講演としては、森林総合研究所関西支所 奥 敬一 主任研究員から、「日本における森林景観保全と風致林施業」と題して、1929 年に出版された田村剛氏の「森林風景計画」の紹介があった。景観保全とは「森林を風致的に解剖して批判することで、その長所を発見してこれを助長し、あるいは短所を見いだしてこれを蔽（おお）うことにある。」とし、林業上は隠す施業が中心だったが、今後は見せる施業として利用者や住民、研究者との協力が必要であり、京都嵐山国有林における風致林施業の歴史と現状の紹介とともに、文化的存在としての森林景観保全の重要性が述べられた（写真④）。



▲写真④ 現在の嵐山

日本森林技術協会 山本 照光 リーダーからは、「国有林における「緑の回廊」と多様性保全」と題して、「緑の回廊」の設定状況と、現在国有林が行っている森林モニタリング調査等の解説があった。具体例として、綾森林生態系保護地域と2箇所の植物群落保護林を結んで設けられた九州山地綾川上流緑の回廊において、協会が担当したモニタリング調査において、クマタカの繁殖状況やニホンジカによる多様性劣化に関する調査結果の紹介があり、綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画の成果を踏まえた今後の取り組み方向についての提案があった（写真⑤）。



▲写真⑤ 綾プロジェクト

シンポジウム当日は、韓国側の発表には日本語の通訳とパワーポイントが提供されたので、韓国における景観復元事業に関する具体的な紹介となった。

最後に、本会 加藤 鐵夫 理事長から閉会の辞があり、今後とも韓国山地保全協会との協働事業を継続していく予定であり、この交流を通じてそれぞれの国における技術の展開に貢献していきたいとの表明があった。

(いしづか かずひろ)